

イギリスの初等シティズンシップ教育に関する資料
—Don Rowe 著 『シティズンシップ教育の導入 小学校のためのハンドブック』—
(A & C Black 社, London, 2001 年)

A notice on Citizenship Education in Primary School in England ;
Don Rowe, "Introducing Citizenship, a handbook for primary schools",
(A & C Black, London, 2001)

大津尚志*・秋宗佑紀**・原田朋香***・須佐佳代****

OTSU Takashi*・AKIMUNE Yuki**・HARADA Tomoka***・SUSA Kayo****

1. 解題

イギリス（イングランドを対象とする）では、現行ナショナル・カリキュラムは、小学校は1999年、中等学校では2007年に制定されたものが実施されている。中等学校においては、シティズンシップ科¹は2002年以來必修教科としての扱いをうけている。いわゆるアジェグボ・レポート²をうけて、2007年にカリキュラムの一部改訂がおこなわれた。小学校においては「非法令的枠組み」としての扱いであり、シティズンシップ科と人格・健康・社会性教育（Personal, Social and Health Education, PSHE）³とは学習内容は同一である。イギリスのナショナル・カリキュラムには週当たりの授業時数の規定がないこともあって、シティズンシップ科とPSHEは一緒にされる（PSHCEなどと称される）ことも多い。なお、中等学校では2007年からPSHEとなり、経済（Economic）教育の要素も含まれることとなった⁴。

なお、2008年10月にはPSHEを小学校、中等学校ともに必修化することが発表され、現在のところ2011年から実施される予定である⁵。現在、カリキュラム改革への動向が進行中である。

本資料は、イギリスの小学校むけシティズンシップ科の教師⁶用指導書として作成された、ビデオ付き（学校での学習の様子が撮影されている）のものである。その構成は以下のとおりである。

序章 どのように本書を使うか

第1章 シティズンシップと初等カリキュラム キーコンセプト

第2章 話すことの重要性 教室による実践的ストラテジー

第3章 リテラシーとシティズンシップ 討論を刺激するために、話と言葉を使う

第4章 学校全体の問題

第5章 教授・学習のスタイル

第1章では、シティズンシップのキーコンセプトとして、「権利」「責任」「合法あるいは公正」を挙げている。自分や他者、コミュニティにおける権利、責任や、問題解決を合法、公正に基づいて行うことがいわれる。

シティズンシップ学習方法としては、「すること」「考えること」「感じること」を挙げている。シティズンシップの時間は、例えば、「なぜ盗むことは悪いことなのかを考える」など生徒にとって精神的、社会的、道徳的発達の間でもあ

る。第2章では、シティズンシップ学習において教室内で話すことの重要性について扱っている。児童がサークルになって話し合いをすること、そのためのルール、「何について話すか」「どこで話すか」などを問題にしている。

第3章では、シティズンシップについて考えるために絵本、物語を使うことが述べられている。「他者の尊重」「いじめ」「ジェンダー」「偏見、不寛容、戦争と平和」「他文化の尊重」「悪口」などをテーマとする本が紹介されている。そして、子どもに話す、聞くスキルを身につけることによって討論をする必要性が述べられている。

第4章では、日々の学校生活での問題を取り上げること⁷の重要性が指摘される。生徒の日々の経験を通じて、学校のルールや校則を建設的な批判にさらすことによって、子どもにとって民主主義や自分の権利について学ぶ機会とな

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

** 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻院生 (Postgraduate student, Mukogawa Women's University Graduate School of Education)

*** 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻院生 (Postgraduate student, Mukogawa Women's University Graduate School of Education)

**** 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻院生 (Postgraduate student, Mukogawa Women's University Graduate School of Education)

る。「学習を評価する、孤立やいじめといった問題をとりあげる、けんかを解決する」などといった学校生活に直接かわる問題を各クラスからの代表があつまる児童会

(School Council)⁸でもとりあげるという方法も登場する。学校と家庭の良い関係づくりの必要性もいわれる。シティズンシップ教育にとってもルールや価値観が家庭と学校には相違がありうることから、子どもにその違いがどのように、なぜ違うかを考えさせることも学校、家庭の両者に愛着をもたせるためのよい方法であるという。学校は異なった人々を尊重しながら包摂 (inclusive) するコミュニティであるとす。

第5章では、本書に附いているビデオに実践例をみることができるが、教育・学習方法についてである。「シティズンシップ・サークル」という、子どもに円になって座らせて話し合いをさせ、教師が子どもの考えを深めさせる⁹という教育方法などが紹介されている。

以下には、第2章のなかに含まれるシティズンシップ教育でテーマにすべき問題を論じた「何について話すか」を訳出する (pp. 24-26)。

なお、本稿執筆にあたっては「解題」は大津が、訳出にあたっては、リード文を大津、「子どもたち独自のアイデア」を秋宗、「学校生活で起きる問題」「ニュースと現在の問題」「テレビ」を原田、「劇やロールプレイ」「絵や写真」「訪問者」「情報技術」を須佐が主として担当した。全体の調整などを、原則として担当者の訳文を尊重しながら大津が行った。

2. 「何について話すか」の翻訳

問題について話すことは、それが現実のものであってもフィクションであっても、子どもに自分自身の世界の見方を描かせ広げる。それゆえ物語は、広範囲にわたる市民性にかかわる問題について探究するための出発点として、価値がある。(中略) 以下は、質の高い話をするために使用できる、多くのいろいろな刺激のいくつかである

「子どもたち独自のアイデア」

シティズンシップをとりまくどんな問題点も、議論することに適している。一度子どもたちが議論において、興味や関心を共有することの価値を認識し始めたら、それらからトピックが見つかるのもっともなことである。一つの学期の合間に、子どもたちのトピックを議論するための時間を割きなさい。前もってこのことを伝えるのは、彼らがアイデアを発見するための時間を与えることになるだろう。子どもたちが議論のためのトピックをそれとなく考えるように導きなさい。子どもたちのアイデアのリストを作って示しなさい。そして議論の日までに他のアイデアを付け加えることができる。彼らはその中から、彼らが話したいトピックを投票することができる。時々、年長の子

どもたちは、彼らが困ったり心配に思っているニュースの出来事を議論したいかもしれません。クラス討論の場で、彼らの関心や心配に思っていることを表現できるようにし、何が起きているかを彼らが理解するのを助けることができるだろう。それと同時に、それが彼らの関心は価値があるのだと子どもたちに確信させる。

「学校生活で起きる問題」

学校やクラスの中で起こる問題は、しばしば、クラスの決定事項に生徒が参加するための貴重な機会を与える。これらは、クラスのルールを決めることから、学校内のいじめやごみなどの問題をどのように扱えばうまくいくのかということにまで及んでいる。問題解決というこの共同体的取り組み (community approach) は、より複雑で現実的な状況を充分考えさせるだけでなく、そのような問題が一人一人の協力によってのみ解決されることを強調する。

「ニュースと現在の問題」

多くの子どもたちはより広い世界で何が起きているかを知らない。彼らは、子どものニュース番組を見ていないし、新聞を読んだことがないだろう。キーステージ2の子どもたちは、クラス討論に記事を持って行くために、だんだん新聞を見るようにしていかなければならない。子どもたちの提案は、クラス全体による議論のために一覧表にして、投票で選ぶことができる。初めのうちは、教師が選んだ身の回りの記事を見本として示す必要があるかもしれない。それは、議論を組み立てて理解を促進するために、初めの指針を提供するのに役立つ。

例：・何/誰についての話なのか？

- ・なぜこれが起こってしまったと考えるか？
- ・誰に責任があったのか？
- ・結果はどうなるだろうか？
- ・新聞の記事は信頼できるだろうか？

ニュースの項目で扱われる最新の問題だけでなく、子どもたちが関係する多くの現代的なテーマがある。さまざまな多くの方法で調べることができるテーマは、以下のものがある。

- ・多民族の意識
- ・マイノリティグループの権利
- ・人と人との関係
- ・地方のコミュニティの改善
- ・環境に気を配ること
- ・警察の役割と他の公共サービス
- ・犯罪と刑罰
- ・人、ふるまい、習慣あるいは集団の間にある類似点と相違点
- ・遠い場所や遠い時代の人々
- ・共生
- ・人々が信じること

・争いと協力

「テレビ」

大多数の子どもたちが見る連続ドラマやその他のテレビ番組は、地域（community）の問題を検討するための貴重な材料源である。多くの子どもが、どのように社会が動いているのかについての知識を受け取っているのは、テレビを通してであることが言われ続けている。伝えられているメッセージをチェックすることが重要である。なぜなら、いくらかの子どもたちは、フィクションと事実を混同してしまうからである。そのようなチェックは、話し合っただけでテレビに映る場面の現実性を検討することが、最もうまくできる。

有益な話は、連続ドラマのある人物を見て、彼らの動機と、行動の結果を検討することから生じる。彼らがどの人物に最もなりたいたいかと、それはなぜかを特定するように、児童に尋ねなさい。これは、どのように人は地域の中で情報を伝え合うのかという議論をするのに、良いスタート地点になり得る。

両親が子どもに見てほしいものが大きく異なるので、テレビ視聴がより制限される家の子どもが議論することから排除されないように保証する配慮が必要となる。これは、議論する初めに話の筋や人物、行動の短い概略を与えることで、避けることができる。

「劇やロールプレイ」

幅広い問題は、ロールプレイや劇を通して検討することができる。子どもたちの小さなグループは、学級全体で討議される場面を実演できるだろう。それぞれの子どもたちがどの役を演じたいのか決めさせる。ポジティブな場面とネガティブな場面の両方を含む場面カードのセットを作ることが効果的である。他にたくさんある物語の本と同様に『考える人（Thinkers）』の絵本¹⁰は、ロールプレイを行う状況にアイデアを与えることができる。物語を演じることは、子どもたちが問題やそれによって生じる感情についてよりよく理解することに役立つ。

良い例の中には、ルイス・サッカー（Louis Sachar）による『穴（Holes）』¹¹（Bloomsbury 社）に登場するスタンリー（Stanley）役やゼロ（Zero）役がある。その男の子たちは少年院から逃げ出し、その少年院は、「人格形成」ための罰で干上がった湖の底に穴を掘ることが行われるところだった。スタンリーは無実だった。ゼロは罪を犯していたが、両親がおらず読むこともできなかった。さらに彼は物心がついたときから、生きるために盗みをしなければならなかった。彼らは、一緒に乾いた砂漠の刑務所へ入れられてから、信じることやお互いに頼ることを学んだ。この単純に書かれた物語は、権力や支配力、いじめ、友情、忠誠心、信頼、家族の価値、過去の出来事の影響だけでなく、正義と公正さや、権利と義務の中心的概念を取り入れた問題への活発な討議を刺激するだろう。

「絵や写真」

すべての子どもたちにとって、とりわけ幼い子どもたち、あるいは言語の違いがある場合、絵や写真は討論を大幅に進めることができる。雑誌の切り抜き、絵画や子ども自身の書いたもののような一連のイメージを使うことができる。絵や写真によってもたらされる一つの利点は、子どもたちが自分の経験やそれらを解釈する世界観を直接描くということである。絵や写真を使うことは、子どもたちの関心を見つけることにとても役立つ。あなたは、次のような質問をすることによって討論をはじめることができる。

- ・この絵を見て何が起きていると思う？
- ・この絵を見て何か言いたいことはない？
- ・この人たちやこの人たちのしていることについて、知りたいことはない？

「訪問者」

シティズンシップ教育の重要な要素は、より幅広い地域との関わりである。警察、消防団、病院、地域の慈善活動などのような組織からの訪問者は、彼らの仕事について話したり、子どもたちが用意していた質問に答えたりするために、学校へ招かれることがある。そのような訪問は、ある組織がどのように昨日しているのかということ子どもたちが理解するのに効果的である。年長の子どもたちのグループは一般的な話、いってみれば地方行政の役割についてよりもむしろ特別な問題についての専門的な情報を得るために地方議員あるいは他の地域の指導者を招待することができる。

「情報技術」

インターネットは今日、シティズンシップ教育のための広範囲にわたった機会を提供している。多数の学校の間でトピックが選ばれ、それによって協議会を開くことができる。異なる国の子どもたちは、インターネットを媒介して彼らの価値観や考えについての情報を交換することが可能である。

—注—

- 1 イギリスのシティズンシップ教育に関する邦語による研究としては、以下のものなどがある。福伊智「現代イギリスにおけるシティズンシップ教育」(『教育学研究紀要』(中国四国教育学会)第44巻第1部,1998年,pp.439-444.),木原直美「英国における Citizenship Education の動向」(『九州教育学会研究紀要』第27巻,1999年,pp.165-172.),同「ブレア政権下における英国市民性教育の展開」(『飛梅論集』創刊号,2001年,pp.99-113.),同「多文化社会における市民性教育の可能性」(『比較教育学研究』第28号,2002年,pp.95-109.),日本ボランティア学習協会編『英国の「市民教育」』2000年,日本ボランティア学習協会,戸田善治「イギリスにおける『市民科』の誕生」(『社会科教育研究別冊』2001年,pp.61-66.),栗原久「英国における市民性教育の新しい展開」(『社会科教育研究』第86号,2001年,pp.26-35.),佐貫浩『イギリスの教育改革と日本』高文研,2002年,今谷順重「イギリスで導入された『新しい市民性教育』の理論と方法」(『社会科研究』第60号,2004年,pp.1-10.),蓮見二郎「英国公民教育の市民像としての活動的公民格」(『公民教育研究』第12号,2005年,pp.43-57.),同「公共的価値の教育としての愛国心教育」(『公民教育研究』第15号,2008年,pp.49-63.)大津尚志「イギリス・フランスの前期中等教育公民科における教育目標と評価」(『公民教育研究』第12号,2005年,pp.113-125.),同「イギリスの公民科教科書に関する一考察」(科研費報告書,研究代表者佐々木毅『イギリスの中等教育改革に関する調査研究—総合制学校と多様化政策— 中間報告書(2)』,2005年,pp.42-53.),清田夏代『現代イギリスの教育行政改革』勁草書房,2005年),藤原孝章「アクティブ・シティズンシップを育てるグローバル教育」(『同志社女子大学社会システム学会現代社会フォーラム』第2号,2006年,pp.21-38.),新井浅浩「イギリスの市民性形成論(1)(2)」(二宮皓編『市民性形成論』,2007年,日本放送出版協会,pp.141-154,pp.155-175.),武藤孝典・新井浅浩編『ヨーロッパの学校における市民的社会的教育の発展』東信堂,2007年所収のイギリス関係論文,窪田眞二「イギリス」(嶺井明子編『世界のシティズンシップ教育』2007年,pp.184-195.),北山夕華「イングランドの市民性教育の実践とその課題」(『日英教育研究フォーラム』第12号,2008年,pp.75-84.),同「教師のシティズンシップ観と市民性教育の実践」(『開発教育』第55号,2008年,pp.60-76),片山勝茂「多文化社会と市民性の形成」(江原武一・山崎高哉編『基礎教育学』放送大学教育振興会,2007年,pp.91-102.)杉本厚夫・高乗秀明・水山光春『教育の3C時代』世界思想社,2008年。
- 2 Curriculum Review :Diversity and Citizenship, 2007, DfES Publication, (<http://publications.teachernet.gov.uk/eOrderingDownload/Diversity&Citizenship.pdf>, 2009.12.9) なお参照,片山勝茂「多文化社会イギリスにおけるシティズンシップ教育」(『教育哲学研究』第97号,2008年,pp.182-187.)
- 3 それは,以下に既に訳出されている。山崎洋子「イギリスの PSHE (Personal, Social and Health Education) とその採用可能性」(『鳴門教育大学学校教育研究紀要』第20号,2005年,pp.59-67.)。なお,他に PSHE に関する邦語文献としては,以下のものなどがある。山崎洋子「学校教育における全人的発達の可能性とイーヴェリンロウ初等学校における PSHE (Personal, Social and Health Education) の実践」(『鳴門教育大学学校教育研究紀要』第20号,2005年,pp.69-78.),柴沼晶子・新井浅浩編『現代英国の宗教教育と人格教育(PSE)』,東信堂,2001年,新井浅浩「イギリスにおける道徳・特別活動の展開とカリキュラムの特色」(『道徳・特別活動カリキュラムの改善に関する研究』国立教育政策研究所,2002年,pp.31-54.),石川道夫「イギリスの PHSE」(『道徳と教育』第318・319号,2004年,pp.288-295.),堀内かおる「英国における子どもの人格的・社会的発達支援の様相」(『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学』第6集,2004年,pp.145-162.),山本舞「中等段階におけるエモーショナル・リテラシーの形成-」(『大阪教育大学社会科教育学研究』第7号,pp.11-20.),広瀬裕子『イギリスの性教育政策史』勁草書房,2009年,小川和久「児童生徒の発達過程からみた PSHE の諸問題」(『東北工業大学紀要 II 人文社会科学編』第29号,2009年,pp.1-7.)。
- 4 小川和久,前掲論文,参照。
- 5 See, Macdonald, A., Independent Review of the proposal to make Personal, Social, Health and Economic (PSHE) education statutory, DCSF, 2009. <http://publications.dcsf.gov.uk/eOrderingDownload/FINAL%20Macdonald%20PSHE%20Review.pdf>, 2009.12.9.
- 6 シティズンシップの教師教育に関して邦語文献としては,大津尚志「イギリスの公民科教員養成カリキュラム」(『中央学院大学人間・自然論叢』第25号,2007年,pp.91-109.),橋崎順子「Citizenship 教員養成に関するチューターの視点についての一考察」(『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第2巻第1号,2008年,pp.43-52.),松尾祥子「イギリスの『市民性教育』における教員養成」(『国際教育文化研究』第9号,2009年,pp.139-150.)。
- 7 なお,フランスにおいても小学校において,学校生活の問題をとりあげた「話し合い」「討論」をすることによって,市民性の育成がはかられた。大津尚志「小学校およびコレージュにおける公民教育」(武藤,新井編,前掲書,pp.49-63.)参照。なお,この「話し合い」「討論」の時間は,2008年の学習指導要領改訂では廃止された。See, B.O. hors-série no.3, 19 juin 2008.
- 8 イギリスの児童会活動などに関して邦語文献としては,佐伯知美「イングランドにおける特別活動」(中谷彪,

- 白井英治, 大津尚志編『特別活動のフロンティア』2008年, 晃洋書房, pp. 132-133.), 新井浅浩・舘林保江「イギリスの学校における教科外教育」(武藤, 新井編, 前掲書, pp. 323-338) 参照。
- 9 サークル・タイムに関して, 邦語文献としては, ハイフィールド・ジュニアスクール編 (大出美知子訳)『学校が変わった』現代人文社, 2000年, 舘林保江「小学校における PSHE および市民性教育」(武藤, 新井編, 前掲書, pp. 280-296.)
- 10 本書 p. 33 によると, 「財産の尊重, 共有, 正直, 寛容をテーマとする, A.Dixon, T. Archbold, *Joe's car*, 「ルール, 権利, 責任, 権威, 友情, 公正, 忠誠心」をテーマとする, D.Rowe, T.Archbold, *The Sand Tray*, といった絵本などをさす。
- 11 なお, 本書は邦訳されている。ルイス・サッカー (幸田敦子訳)『穴』講談社, 2006年)

(受理日: 2010年1月20日)